

中学 2 年 2 組 国語科学習指導案

指導者 鳥屋尾 慎人

1 単元名 調和のとれた字で相手を引きつけよう ～行書「短歌」～

2 単元のねらい

行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して、読みやすく速く書くこと。

3 授業の構想

(1) 生徒は、国語の時間に、お互いに読み合い評価し合う学習を繰り返し行っている。そこでは、「友達を読み、学ぶ」という相手や目的を伝えて書かせている。しかし、生徒の文字を見ると読みやすく丁寧な字を書きたいという願いをもちながら、学習の際に、自らのノートと友だちが目を通すもの、学習成果物としてのレポート等で目的に応じて意識を変えて文字を書くことができる生徒は少ない。むしろ、どの目的、どの相手でも同じ文字を書く生徒の方が多い。また、生徒は日ごろ書いている文字を自分で振り返り、「自分の文字がどのように見られているのか」「自分はその文字をどう見ているのか」「どこが課題なのか」という「メタ認知」をあまり行っていないように感じている。しかし、自らの文字を振り返る時に「私も文字をもっときれいに、丁寧に、見やすく書きたい」という関心・意欲・願いがないかぎり学習は効果的に行われぬ。自らの文字を振り返り、課題や良さを発見する「メタ認知」を働かせ、活動そのものに意欲的に取り組むために活動への必要性を感じられる場の設定や学習材の設定が大切になる。加えて、相互評価をすることで、他者から良いところを認められて自己肯定感が高まるようなサイクルのある単元にしていくことが必要となる。

そこで、本単元では行書を学ぶことの必要感をもたせるために、日常生活で行書を使う場面を設定し、自分の書いた文字を見直し、どう書いたらよいのかを考えさせるようにした。その上で、行書で書かないといけない「和歌」の返歌の場を設定し、生徒が書いたものをお互いに見合って評価できるようにした。決まった手本を設定せず、お互いの良さを見つけ合い、肯定的な評価がなされる活動としたい。これらの学習の積み重ねが、相手を意識し、書く文字に気を配り相手や目的に応じて文字を書くことができる子どもの育成につながっていくと考えている。

(2) 本題材を通して、国語科で目指す資質・能力を身に付けるために、以下の点を大切にしながら授業を展開する。

○思考の必然性を実感させる単元構成の工夫

(自らが書いた字をふりかえり、課題を設定するための手立て)

生徒は、今までの生活の中で速く書いたときに、自分で自分が書いた文字が読めないという体験を何度かしたことがある。特に、自分で書く速さを決められず話す相手のスピードに合わせて文字を書く場面で起こりやすい。そのため、そのような場面をあえて設定し、自分

が書いた文字を自分で振り返り，友達が評価することにより，読みやすく書くためにはどうしたらよいのか自分なりの課題意識をもたせたいと考えている。そのことが，学習への必要感につながり，字を書くときに活かされ生活につながる能力として身につけていくはずである。

○思考の必然性を実感させる単元構成の工夫（目的意識や相手意識の高まりを促す場面の設定）

行書体で書くという必然性を生徒に感じさせるためには，適切な場面を設定しなければならない。ただ，単元の中の「日常生活の場面」として「設定する電話の会話をメモしよう」で書く字をお互いに相互評価するとしたら，「読みやすい」という一点で絞られてしまい，読みやすいからよいという感想交流で終わってしまう。しかも，自分の中で完結するので仕上げるという目的意識や相手意識もなかなかもちにくい。そこで，自分の中で完結するので仕上げるという目的意識や相手意識もなかなかもちにくい。そこで，生徒が学習した「短歌」を題材に作品として書くという時間を学習のまとめとして設定した。元来和歌は，相手の和歌に対して，その場ですぐに返歌を書き相手に渡すものであったということ踏まえて，行書体で書く必然性をもたせる。また，作品の鑑賞をするときも，和歌の風習から送り手と受け手の存在があり，受け手としてその作品をどう思うかということ踏まえて，行書体で書く必然性をもたせる。また，作品の鑑賞をするときも，和歌の風習から送り手と受け手の存在があり，受け手としてその作品をどう思うかということ踏まえて，大事にしていきたい。

4 展開計画（全3時間 本時 3 / 3）

次	時	主な学習と具体的な学習・内容	◇願う子どもの姿
1	1	○今までの書写学習の復習をする。 ・今まで書いた行書作品を振り返り，行書の特徴を振り返る。 ○行書の良さを考え，日常生活で活用できる場面を考える。	◇今まで学んだことや身に付けたことを言葉で表現できる姿。 ◇行書の良さや，実際に使用したらよい場面を考えている姿。
2	2	○今までの学習を活かして，日常にある場面を想定して行書体で書いてみる。 ・行書体を用いた方が便利な場面を示し，実際に行書体で書く。 ・様々な筆記具を用いて書いてみる。 ○自分が書いたものを振り返る。 ○お互いに書いたものを見合って相互評価する。 ○自分が書いた文字の課題を見つける。 ○行書体にはさまざまな書き方があることを資料や書体字典を参考にして学習する。	◇自分が書いた文字や友だちが書いた文字の課題やよさを探している姿 ◇自分にとって書きやすい行書体を探そうとしている姿
3	③	○平安時代に和歌を互いにやりとりする場面では，速く美しく書くことが一つの教養であったことを知り，行書体で和歌を書く。 ・様々な「恋」の歌から好きな和歌の一つ選ぶ。 ・行書体で，和歌を書いていく。 ・書いたものを互いに評価する。	◇学習した短歌やその資料，紹介した和歌から好きな短歌を選ぼうとしている姿 ◇和歌の語感や意味から筆記具や書き方を考えている姿 ◇友だちの良さを発見し，書いたり課題を伝え合ったりし共に向上しようとする姿

5 本時の学習

(1) ねらい

今までの学習を活かしながら、短歌を行書体で漢字とひらがなを調和させて書くことができる。

(2) 展開

学習場面と子どもの取組	教師の支援と願い・評価
1. 和歌を送る時の状況を知り,同じような場を設定し本時に作品を書くことを知る。	<ul style="list-style-type: none"> 和歌のやりとりの仕方について伝え,行書体で速く美しく書く必要性があったことを伝える。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> あなたの書いた文字で相手の心を振り向かせよう！ </div>	
2. 本時の学習について説明を聞く。 3. 自分が作品として書きたいものを一つ選ぶ。 ・この作者の心情はよく分かるからこの歌にしよう。 4. 選んだ短歌を行書体で書く。 ・どんな雰囲気の色を書こうかな。 ・どんな配置で書こうかな。 ・どの筆記具で書こうかな。 ・この歌を書くとしたら, 悲しい作者の思いが伝わるように筆ペンで薄く書いてみよう。 5. お互いに書いた作品を鑑賞する。順番に作品を見合い, 鑑賞した作品の裏側にはコメントを付せずに書き, 作品の裏に貼っていく。 6. 単元のふりかえりと今後の生活の中で行書体を用いて書くことについて考えを書く。 ・ただ急いで速く雑に書くのではなく, よりきれいに書いていきたい。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が選びやすいように, 百人一首の中に出てくる和歌や短歌の単元で学習した短歌を選び, 一覧表を作り生徒に配る。 短歌の鑑賞の学習をしているので語感や雰囲気, 作者の心情を踏まえて生徒が好きなものを選んで欲しい。 選んだ歌や, 文字を誰が書いたか分からないようにペンネームを用いて書く。 鑑賞したイメージや言葉から筆記具を選び, 書く文字の雰囲気を考えて欲しい。 <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0; text-align: center;"> <p>— 評価の観点（書くこと） —</p> <p>漢字と仮名を調和させて行書体で書くことができている。</p> <p>【評価方法 作品・観察】</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 行書体として正しい, 間違っているという相互評価をするわけではないので, 手本等は見ない。 文字に関するコメントや, 短歌の鑑賞からの表現, 筆記具の選び方等, 表現の工夫についてのコメントをそれぞれの言葉で書いて欲しい。 友だちからのコメントを見て, 今回の作品について振り返る。また, 単元全体の感想やこれから字を書くことについての考えを書く。

